ユズ幹腐病の発生生態と防除

はじめに

ユズはカンプチの八ヶ山沿いのうちで最も耐寒性が強く、また気温の低い山間では鮮黄色の外観品質のよい果実ができるため、山間地域の主幹作物として昭和30年代より発展してきた。特に近年は林業が不振のため山間部の農業での農業所得に占めるユズの比重は極めて大きい。現在では、徳島県のユズ栽培は栽培面積371ha、生産量4,500t（1998年）で全国第2位を占めている。

ユズで問題となる病害としては、そうか病、黒点病などがあるが、本県の主産地である那賀川上流地域では、枝幹部がしみ鉄状にくぼみ、木質部まで腐り込む幹腐病が多発し問題となっている。本病が見られるはじめた1980年ごろは、古い樹に発生が多く、主に主幹部を中空に病斑が見られたが、最近では、定植後5〜6年の若木も発生が目立つようになってきており、改植して着果し始めたところは主幹部がどこかに感染してしまっている樹も見られる。多発する鉄状下方は、果実の果実に折れやすくなり、枯れ枝の増加で黒点病の発生が増えるなど収穫の大きな要因となっている。

ここでは、これまでに明らかとなったユズ幹腐病の発生状況及防除対策について紹介する。

I 病徵および発生状況

1 病徵

幹腐病の病徵は、主幹部や枝の枝幹部、水平に近い枝の下側など日光が当たりにくい部分に多い。症状が進むとしみ鉄状または溝状の凹みを生じて腐敗し、激しいものは枝幹に凹凸が生じて変形を呈する。腐朽が木部深くまで達し、果実の果実が折れたり、枯死するもある。

病斑は、程度別に示すと表-1のようになるが、外観健全な枝でも樹皮を剥離すると小さな病斑が見られる。

初期の病斑は樹皮裏側のみに褐変が見られ、症状が進むにつれて、木質部も褐変し、さらに進むと樹皮と木質部が接触する。このような樹皮表面から見えない小さな病斑は2年生以上の枝で見られる。

樹皮表面での初期病徵としての樹皮表面に発生1〜3mm程度の小さな丸形が乾死部が見られるようになる。

この小さな単離は乾いており、多くの枝に腫らし、見つけるのが注意して見されることが見つける。

病患株周辺の健全な部分が乾燥してくると病患株が側面してくるようになる。この病患株表面には春から初夏と秋から冬の年2回。黄色で乾燥、直径1〜2mmの子のう盤が発生する。子のう盤発生は梅雨季期が多い。

子のう盤からは子のう胞子が飛散し、その飛散量は6月下旬から7月上旬にかけて最も多くなる。

感染から子のう盤発生するまでの期間は、接種試験では約2年であった。しかし、幹腐病多発園に苗木を移植し、観察を続けてながれ、発病した病斑を確認してから3年経過しても子のう盤発生の発生は見られていなかった。このことから、自然感染では感染から子のう盤発生までの期間は4年以上と考えられる。

表-1 ユズ幹腐病の程度別病徴

<table>
<thead>
<tr>
<th>表-1</th>
<th>ユズ幹腐病の程度別病徴</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>初期病斑（樹皮裏側のみ褐変）</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>初期病斑（木質部も褐変）</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>仮性病斑（暗紅色）</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>仮性病斑（樹皮表面に黒化）</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>子のう盤発生</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Occurrence and Control of Concave Stem Canker of Yuzu (Citrus junos). By Mitsuhiro Sadano

（キーワード：ユズ、幹腐病、Lachnum abnorme、生態、防除）